

今回は、サムエル記第一 18 章から学びます。

I. ヨナタンの信仰 (1-4)

まず、1~4 節までをご覧ください。

「1 ダビデがサウルと語り終えたとき、ヨナタンの心はダビデの心に結びついた。ヨナタンは、自分自身のようにダビデを愛した。2 サウルはその日、ダビデを召しかかえ、父の家に帰らせなかった。3 ヨナタンは、自分自身のようにダビデを愛したので、ダビデと契約を結んだ。4 ヨナタンは着ていた上着を脱いで、それをダビデに与え、自分のよろいかぶと、さらに剣、弓、帯までも彼に与えた。」

ヨナタンは、サウルの息子です。ダビデがペリシテ人を打ち破り、そのことをサウルに報告したとき、ヨナタンの心はダビデの心に結びつきました。ダビデの行動を見て、またその言葉を聞いて、感動したのでしょう。

その日サウルは、ダビデを召しかかえ、家に帰らせませんでした。親衛隊として仕えさせ、王宮に住まわせることにしたのです。この時から、ダビデはサウルの側近として生活するようになりました。

息子ヨナタンは、自分自身のようにダビデを愛したので、彼はダビデと契約を結びました。何の契約でしょうか。友人としての契約です。ここに彼がダビデを愛したとあるのは、勿論恋愛感情のことではありません。言ったことは必ず成し遂げるという契約に基づいた関係のことです。その証拠として、彼は自分が来ていた上着を脱いでダビデに渡しました。そればかりか、自分のよろいかぶと、さらに剣、弓、帯までも彼に与えました。このように、自分の上着やよろいかぶと、剣、弓、帯を与える行為は、自分の将来の王位をダビデに引き渡したことを意味しています。昔、ヤコブが息子ヨセフに長服を与えましたが、それと似ています。それはヤコブがヨセフに長子の権利を与えることを意味していましたが、ここでも、ヨナタンがダビデに自分の武具を引き渡したということは、父サウルから受け継ぐべき王位を彼に明け渡したことを意味しているのです。

ヨナタンはダビデよりも年長でした。しかし彼は、ダビデの成功や人気をねたむどころか、ともに喜ぶことができる人でした。言い換えれば、彼は主がダビデの人生を通して行っておられることを喜ぶことができたということです。バプテスマのヨハネはイエス様に対して、「あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。」(ヨハネ 3:30)と言いましたが、それと同じです。

あなたの中に、他の人を通して神が行っていることを喜ぶ心があるでしょう。これこそ真にへりくだった人の心です。神は、それぞれに賜物を与えてくださいました。その与えられた賜物を互いに認め合い、互いに尊重し合い、互いに喜び合う者でありたいと思います。

II. サウルの妬み (5-16)

次に、5～16節をご覧ください。まず11節までをお読みします。

「5 ダビデは、サウルが遣わすところどこへでも出て行き、勝利を収めた。サウルは彼を戦士たちの長とした。このことは、すべての兵たちにも、サウルの家来たちにも喜ばれた。6 皆が戻り、ダビデがああのペリシテ人を討ち取って帰って来たとき、女たちは、イスラエルのすべての町から、タンバリンや三弦の琴をもって、喜びつつ、歌い踊りながら出て来て、サウル王を迎えた。7 女たちは、笑いながら歌い交わした。「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った。」8 サウルは、このことばを聞いて激しく怒り、不機嫌になって言った。「ダビデには万と言ひ、私には千と言ひ。あれにないのは王位だけだ。」9 その日以来、サウルはダビデに目をつけるようになった。10 その翌日、わざわいをもたらす、神の霊がサウルに激しく下り、彼は家の中で狂いわめいた。ダビデはいつものように豎琴を手にして弾いたが、サウルの手には槍があった。11 サウルは槍を投げつけた。ダビデを壁に突き刺してやろうと思ったのである。ダビデはサウルの攻撃から二度も身をかかわした。」

ダビデは、サウルが遣わすところどこへでも出て行き、勝利を収めました。それでサウルは彼を戦士たちの長としました。そのことは、すべての兵たちにも、サウルの家来たちにも喜ばれることでした。

しかし、そうでない人物が一人だけいました。サウルです。最初はサウルも、ダビデのような勇士が与えられたことを喜んでいましたが、残念ながら、彼はダビデを妬み、自分の王位を脅かす人物として敵視するようになります。

そのきっかけとなったのが、女たちの歌です。ダビデがゴリヤテを討ち取ってかえって来たとき、女たちは、すべての町から、タンバリンや三弦の琴をもって、喜びながら踊りながらサウルを迎えた時、このように歌ったからです。笑いながら・・・

「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った。」

それでサウルは激しく怒り、不機嫌になりました。ダビデに万と言い、自分には千と言ったからです。つまり、自分よりもダビデを上にしたと感じたのです。ダビデにないものがあるとしたら、それは王位だけです。その日以来、サウルはダビデに目をつけるようになりました。これが罪人の特徴でもあります。信仰の目でみれば、私たちには上下などありません。私たちはみなキリストのからだであり、互いに補い合い、助け合います。だれが上で、だれが下かという差はありません。ところが、サウルは自分のことしか考えていませんでした。彼はダビデに王位が奪われるのではないかと疑心暗鬼になったのです。そして、その翌日、わざわざをもたらす、神の霊がサウルに激しく下り、彼が家の中で狂いわめくと、ダビデはいつものように豎琴を手にして弾きましたが、サウルは槍でダビデを殺そうとしました。彼が高ぶりや妬みという自分の肉の問題を処理していなかったため、悪い霊の影響をまともに受けてしまったのです。

妬みは私たちから平常心を奪います。妬みが起こってくるのは、私たちが神のわざよりも自分の成功に関心があるからです。伝道者の書 4:4 には、「私はまた、あらゆる労苦とあらゆる仕事の成功を見た。それは人間同士のねたみにすぎない。これもまた空しく、風を追うようなものだ。」とあります。主に用いられている人に対して妬みを起こすことがないように祈りましょう。また、一人一人がその賜物にふさわしく用いられるように祈りましょう。

12 節から 16 節までをご覧ください。

「12 サウルはダビデを恐れた。それは、主がダビデとともにおられ、サウルを離れ去られたからである。13 サウルはダビデを自分のもとから離し、彼を千人隊の長にした。ダビデは兵の先に立って行動した。14 主が彼とともにおられたので、ダビデは、行くところどこでも勝利を収めた。15 彼が大勝利を収めるのを見て、サウルは彼を恐れた。16 イスラエルもユダも、皆がダビデを愛した。彼が彼らの先に立って行動したからである。」

サウルはダビデを恐れしました。それは、主が自分から離れ去り、ダビデとともにおられることを感じたからです。それで彼はダビデを千人隊長に任じ、戦場に送り出すことで、敵の手で彼を殺そうと企みました。しかし、主が彼とともにおられたので、ダビデは、行く先々で勝利を収めました。それでサウルはますます彼を恐れましたが、イスラエルもユダも、皆ダビデを愛しました。それは彼自らが先頭に立って行動したからです。自分を犠牲にすることを決して厭わなかったのです。ここに真のリーダーの姿が描かれています。真のリーダーとは、後ろの方であぐらをかいて座っている人ではなく、民の先頭に立って仕える人です。イエス様も、「人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」(マルコ 10:45)と言われました。私たちも自分のいのちを与える覚悟で仕える者でありたいと思います。

Ⅲ. 陽の皮百 (17-30)

次に、17 節から 30 節までをご覧ください。19 節まで見てください。

「17 サウルはダビデに言った。「これは、私の上の娘メラブだ。これをおまえの妻として与えよう。ただ、私のために勇敢にふるまい、主の戦いを戦ってくれ。」サウルは、自分の手を下さないで、ペリシテ人に手を下させよう、と思ったのである。18 ダビデはサウルに言った。「私は何者なのでしょう。私の家族、私の父の氏族もイスラエルでは何者なのでしょう。私が王の婿になるとは。」19 ところが、サウルの娘メラブをダビデに与えるというときになって、彼女はメホラ人のアデリエルに妻として与えられた。」

サウルは槍でダビデを殺そうとしましたが、失敗に終わりました。それで千人隊長に任じ、戦場に送ることで自然に討ち取られるように計りました。しかし、主がダビデとともにおられたので彼はどこでも勝利を収め、むしろ、民の尊敬と信頼を勝ち取ることになりました。そこでサウルが次に考えたことは、ダビデをペリシテ人と戦わせ、彼らの手によって葬り去ることでした。

サウルはダビデに、もし、ペリシテ人との戦いで勇敢にふるまい、勝利した暁には、自分の娘メラブを妻として与えると言いました。この約束はすでにペリシテ人ゴリヤテに勝利した時に実行されていなければならないものでしたが、不誠実なサウルはそれを実行せず、ここでさらに新たな条件を

加えたのです。それがこの戦いです。

ダビデは、謙虚に王の申し出を受け入れましたが、その娘メラブをダビデに与えるときになって、サウルは何とそのメラブをメホラ人アデリエルに妻として与えてしまったのです。これはダビデにとって大いなる侮辱でした。いやそれ以上に、神に対する侮辱でした。彼が公に誓った約束をいとも簡単に破ったからです。彼は他人には厳しく、自分には甘いという弱さがありました。それは私たちも同じです。他人には厳しくても、自分には甘いという面があります。それは神に信頼を置いているのではなく、利己的に歩んでいるからです。まことに主を恐れ、主に信頼する人は幸いです。いつも主を恐れて歩ませていただきますよう。

次に、20～30 節をご覧ください。

「20 サウルの娘ミカルはダビデを愛していた。そのことがサウルに告げられた。そのことは、サウルの目には良いことに思えた。21 サウルは、「ミカルを彼にやろう。ミカルは彼にとって罌となり、ペリシテ人の手が彼に下るだろう」と思った。そして、サウルはもう一度ダビデに言った。「今日こそ、おまえは婿になるのだ。」22 サウルは家来たちに命じた。「ダビデにひそかにこう告げなさい。『ご覧ください。王はあなたが気に入り、家来たちもみな、あなたを愛しています。今、王の婿になってください。』」23 サウルの家来たちは、このことばをダビデの耳に入れた。ダビデは言った。「王の婿になるのがたやすいことに見えるのか。私は貧しく、身分の低い者だ。」24 サウルの家来たちは、ダビデがこのように言っています、と言ってサウルに報告した。25 サウルは言った。「ダビデにこう言うがよい。王は花嫁料を望んではない。ただ王の敵に復讐するため、ペリシテ人の陽の皮百だけを望んでいると。」サウルは、ダビデをペリシテ人の手で倒そうと考えていた。26 サウルの家来たちはこのことばをダビデに告げた。王の婿になることは、ダビデの目には良いことに思えた。そこで、期限が過ぎる前に、27 ダビデは立って、部下と出て行き、ペリシテ人二百人を討って、その陽の皮を持ち帰った。こうしてダビデは、王の婿になるために、王に対して約束を果たした。サウルは娘ミカルを妻としてダビデに与えた。28 サウルは、主がダビデとともにおられ、サウルの娘ミカルがダビデを愛していることを見、また知った。29 サウルは、ますますダビデを恐れた。サウルはずっと、ダビデの敵となった。30 ペリシテ人の首長たちが出陣して来たが、彼らが出て来るたびに、ダビデはサウルの家来たちのすべてにまさる戦果をあげ、彼の名は大いに尊ばれた。」

サウルのもう一人の娘ミカルはダビデを愛していました。そのことがサウルに告げられると、それは良いことだと思いました。ミカルを利用してダビデを殺そうと思ったのです。そこでサウルは家

来たちに命じて、そのことをひそかにダビデに伝えました。なぜひそかに告げたのでしょうか。メラブの一件があったので、受け入れられないと思ったのでしょうか。

案の定、サウルの家来たちがそのことをダビデに告げたとき、彼は「王の婿になるのがたやすいことに見えるのか。私は貧しく、身分の低い者だ。」(23)と言いました。自分は貧しく、身分が低い者なので、花嫁料が支払えないと断ったのです。

その報告を聞いたサウルは、さらにダビデに伝言を届けました。それは、花嫁料は望まないが、その代わりにペリシテ人の陽の皮を百持ってくるようにということでした。「陽の皮」とは、男性の性器の先端部分の包皮のことです。イスラエル人は生後すぐに割礼するので陽皮はありませんが、ペリシテ人は異邦の民なのでみな陽皮がありました。その陽の皮を持ってくるとは、彼らを打ち倒しその証拠として割礼と同じ処置を行い、それを持ってくるということです。もしダビデがそのような屈辱的なことをするなら、ペリシテ人は総力を挙げてダビデを殺そうとするでしょう。それがサウルの狙いだったのです。

王の婿になれるのであればと、ダビデは期限が過ぎる前に部下とともに出て行き、ペリシテ人 200 人を討って、その陽の皮を持ち帰りました。要求された 100 の陽の皮でしたが、彼はその倍の 200 をサウルに与えたのです。それでサウルは娘ミカルを妻としてダビデに与えました。

この出来事を見たサウルは、ますますダビデを恐れました。なぜなら、主がダビデとともにおられることが明らかとなったからです。また、娘ミカルがダビデを愛していることを見たからです。

このことからわかることは、人は神がその人に与えた計画が成就するまでは、決して死なないということです。ダビデには、イスラエルの王になるという預言、神ことばが与えられていました。その預言が実現するまでは、決して死ぬことはありません。これはダビデだけでなく、私たちも同じです。すべてのクリスチャンには、神からの使命と計画が与えられています。それが成就するまでは、決して死ぬことはありません。今、世界中がコロナウイルスで不安と混乱の中にありますが、このことを知り、すべてを計画しておられる神にゆだねることができれば、どんなに平安なことでしょう。すべてを支配しておられる主の御手にゆだね、主の御手の中で平安をいただきましょう。